

## 審査の結果の要旨

氏名 森 一平

本博士論文は、規範の教授－学習としての「社会化」を、人々がいかに実践しているのかについて、エスノメソドロロジーの手法を用いて経験的に記述することを目的としている。本論文は5部構成であり、第I部を構成する第1章と第2章では、問題設定と研究手法の独自性が論じられる。第1章では社会学内で大きな影響を及ぼしたパーソンズの社会化論とその前史、そしてブレツィンカによる包括的なモデル化を踏まえた上で、社会化の過程、境界、結果という3つの位相の解明が課題であることを導いている。第2章では、エスノメソドロロジーという手法の特長が、行為者の内面の解釈でも研究者が用意したカテゴリーを対象者に当てはめるのでもなく、行為者が実践場面で用いている秩序構成的な「方法＝メソッド」の記述にあることが説明される。

第II部は、社会化の過程に焦点を当てた第3章・第4章から成る。第3章では、幼稚園3歳児学級における教師と園児たちの相互作用の分析を通じ、従来指摘されていた質問－応答－評価という隣接発話に加え、指示－応答－評価および呼びかけ－応答という連鎖をも駆使して行為規範が伝達されていることが指摘される。さらに第4章では、黒板を使用した反復発話による知識産出、園児全体を巻き込む指示－応答－評価による学級秩序産出、という「学級的社会化」の諸相を見出している。

第III部には、社会化可能なものの境界を主題とする第5章・第6章が含まれる。第5章では、その境界線上にあるものとして繰り返し議論されてきた「主体性」をめぐり、小学校1年生の授業場面の分析が示される。その結果、挙手－指名という連鎖が「主体性」の発動に関する規範として伝達されていること、児童による解釈の自律性を保護した形での修復－訂正の連鎖が生み出されていることが見出され、「主体性」形成が社会化の内部に位置づけることが指摘される。第6章では、薬物依存経験者Aさんの語りの分析を通じ、依存からの回復という社会化実践の中で、変えられるもの／変えられないものという境界線をAさん自身が繰り返し引き直していること、すなわち、何が社会化可能で何がそうでないかという線引き自体が社会化の一環であることが見出される。

第IV部にあたる第7章では、社会化の結果に焦点が絞られる。幼稚園と小学校における相互作用の分析から、規範を知っていることと規範に従うことの間にあるギャップを埋めるために、叱責を通じた道徳的責任の帰属が活用されることが指摘される。

第V部の終章では、本論文全体の知見とインプリケーションが議論され、秩序維持・主体性・知識・道徳が螺旋状にからまりあう形で実践されている社会化の様相が提示される。

本論文は、エスノメソドロロジーという手法を最大限に活かしつつ、社会化現象の3つの位相と、そこで行使されているメソッドを丹念に描き出しているという点で、社会化に関する従来の認識を明らかに精緻化させ前進させるものである。以上より、本論文は博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。